

# 蔡京に関する研究

——特に彼の経歴を中心として——

安 蕪 幹 夫

## 目 次

- 一. はじめに
- 二. 蔡京の時間的・空間的に見た経歴
  - 1. 時間的な経歴
  - 2. 空間的な経歴
- 三. 蔡京の財政々策概観
- 四. 結びにかえて

## 一. は じ め に

蔡京は、慶暦7（1047）年に生まれ、靖康元（1126）年に79才で死亡している。彼は北宋末の8代目皇帝徽宋朝時代に宰相として勢力を確立すると、史料に「蔡京当政令陝西鑄当十錢及夾錫錢」とあり、また「更塩鈔法」とあるように、当十錢や夾錫錢などの輕惡錢を鑄造して貨幣の名目的数量の増大、また塩鈔法の大改革を行って通商法を施行し、強力に塩利所得の増加をはかった。北宋末の財政・金融政策、なかんずく蔡京の政策を解明すべく、本稿においてはその前提として、彼の経歴を史料によって時間的・空間的におさえたものを前半に述べ、後半には先学者達の蔡京に関する諸研究を概説していく予定である。尚、本稿で参考にした論文・書籍につ

いては最後に一括して掲載することとする。

## 二．蔡京の時間的・空間的に見た経歴

### 1. 時間的な経歴

まず「宋史」巻472，列伝巻231，姦臣2，蔡京の項の中で必要と思われる箇所をここに掲げ，この史料を手掛りとして「続資治通鑑長編」・「文献通考」・「宋会要輯稿」・「宋史紀事本末」・「宋史」等の史料をも検索し，詳細に彼の経歴を考察していこう。

蔡京字元長興化仙游人，登熙寧三年進士，第調錢塘尉舒州推官，累遷起居郎，使遼還拜，中書舍人時，弟卞已為舍人，故事入官以先後為序，卞乞班京下兄弟同掌書，命朝廷采之，改龍圖閣待制知開封府，……，台諫言，京挾邪壞法出知成德軍，改瀛州徙成都，……，改江淮荆浙發運使，又改知揚州，歷鄆永興軍遷龍圖閣直學士，復知成都，……，以京為翰林學士兼侍讀修國史，……，以同升但進承旨，徽宗即位罷，為端明龍圖兩學士知太原，……，斥京亦出知江寧，……，右正言起京知定州，崇寧元年徙大名府，……，復用為學士承旨，……，拜尚書左丞，俄代曾布為右僕射，二年正月進左僕射，……，累轉司空封嘉國公，京既貴而貪益甚，已受僕射奉復創取司空，五年進司空開府儀同三司安遠軍節度使改封魏國，……，京免為開府儀同三司中太一宮使，……，大觀元年復拜左僕射，……，拜太尉受八寶拜太師，三年，……，改封楚國，……，至是貶太子少保，政和二年召還京師復輔政徙封魯國，

熙寧3（1070）年 進士合格

9（1076）年7月壬戌

舒州團練推官蔡京權流內銓主簿

10（1077）年7月壬申

舒州団練推官權留内銓主簿蔡京，為崇文院校書中書礼房習学公事  
元豐元（1078）年8月壬寅

舒州団練推官崇文院校書中書礼房習学公事蔡京，為大理評事權檢正  
礼房公事

2（1079）年8月庚子

大理評事崇文院校書權檢正中書礼房公事蔡京，為太子中允館閣校勘

3（1080）年1月庚寅

命檢正中書戸房公事蔡京，兼編修諸路学制

” 8月壬寅

校正中書戸房公事太子中允館閣校勘蔡京，為集賢校理權提点開封府  
界諸県鎮公事

4（1081）年10月庚申

通直郎集賢校理蔡京落職

5（1082）年3月戊申

……・通直郎蔡京・……

” 7月辛卯

考功員外郎蔡京言

” 7月庚子

通直郎考功員外郎蔡京，為起居郎仍同詳定官制

” 12月己未

……・通直郎試起居郎蔡京各遷一官

6（1083）年2月癸酉

起居郎蔡京撰

” 8月乙酉

奉議郎試起居郎蔡京，為遼主

” 9月丙寅

……・蔡京・蔡卞領戸礼部・……

” 10月丁丑

起居郎蔡京・起居舍人王震並試中書舍人

” 11月癸丑

中書舍人兼侍講蔡卞乞，敘班於兄京之下，從之 京除中書舍人，在十月五日丁丑

7 (1084) 年 6 月己巳

……，命中書舍人蔡京，……

11月丁未

中書舍人蔡京，為龍圖閣待制知開封府

8 (1085) 年 2 月癸未

……，知開封府蔡京……

11月甲戌

……・權堯遣開封府蔡京……

元祐元 (1086) 年 2 月辛未

先是起居郎蔡京言

” 閏 2 月庚戌

……・權知開封府龍圖閣待制蔡京・……

” 3 月乙丑

除知密州蔡京知開封

” 12月壬辰

……・龍圖閣待制知成德軍蔡京

4 (1089) 年 6 月丁巳

……・龍圖閣待制知瀛州蔡京，為寶文閣直學士知成都府，……，詔京為江淮荆浙等路堯運使，罷寶文閣直學士知成都府

” 7 月丙申

新江淮荆浙等路制置堯運使龍圖閣待制蔡京，知揚州

5 (1090) 年 5 月丙寅

……・知揚州龍圖閣待制蔡京，知潁昌府

” 5 月己未

……・新知潁州府龍図閣待制蔡京，知鄆州

” 閏8月甲子

龍図閣待制知鄆州蔡京，知永興軍 按蔡京以元祐元年二月二十二日，自開封府改成德，二年十二月十四日，自成德改瀛州，四年六月十八日，自瀛州除成都，于二十日改発運，七月二十八日，又改揚州，五年五月二日，自揚州改潁昌，六月二十六日，又改鄆，六年閏八月六日，自鄆改永興，七年四月一日，自永興改成都，政目在三月二十八日

7 (1092) 年4月癸丑

龍図閣待制知永興軍蔡京，為龍図閣學士知成都府  
紹聖元(1094)年

……，戸部尚書蔡京言

4 (1097) 年4月丁亥

翰林學士承旨蔡京言

” 5月戊辰

(紹聖)四年閏二月，……，當此時蔡京為承旨

元府元(1098)年6月甲午

翰林學士承旨朝散大夫蔡京，遷朝請大夫

2 (1099) 年3月己未

館伴蔡京等詣

” 閏9月乙未

其詳定官蔡京

3 (1100) 年11月1日

知江寧府となる

建中靖國元(1101)年11月

復召蔡京為翰林學士承旨

遂起京知定州，改大名

崇寧元(1102)年5月庚辰

中書侍郎蔡京・趙挺之，為尚書左・右丞

” 7月戊子

蔡京為尚書右僕射兼中書侍郎

” 8月5日

提挙講義司となる

2 (1103) 年2月丁未

蔡京為尚書左僕射兼門下侍郎

3 (1104) 年5月7日

守司空となし、嘉国公に封ず

5 (1106) 年2月丙寅

蔡京罷、……、而免京為中太一宮使

大觀元 (1107) 年1月甲午

蔡京為尚書左僕射兼門下侍郎

” 12月9日

太尉となる

2 (1108) 年1月戊寅

加蔡京太師

3 (1109) 年6月丁丑

蔡京罷、……、遂罷為太一宮使

” 11月己巳

蔡京進楚国公、致仕

4 (1110) 年5月甲子

貶蔡京出居杭州

政和元 (1111) 年6月4日

太子少師に復す

” 8月乙未

復以蔡京為太子太師

2 (1112) 年2月戊子

詔蔡京復以太師致仕、……京自杭州召還

3 (1113) 年11月癸未

宰相蔡京率百僚称賀

7 (1117) 年6月戊午

進封蔡京為魯国公, 京辞两国不拜

宣和2 (1120) 年6月戊寅

詔蔡京致仕

6 (1124) 年12月

詔蔡京復領三省事

7 (1125) 年4月

勒蔡京致仕

靖康元 (1126) 年2月18日

秘書監分司南京に貶す

” 3月30日

崇信軍節度副使に貶す

” 7月11日

儋州安置となる

” 7月21日 没す

以上、蔡京が熙寧3 (1070) 年に23才で科挙試験に合格し、進士として地方役人に着任して地方政府、そして六部・中央政府に入って宰相となり、政策を担当した課程を史料によって見てきた。特に「蔡京輔政八年」と他の史料に言われているように、崇寧元 (1102) 年に宰相に就任してから彼の政治活動はピークに達するのである。いま、「宋史紀事本末」によって、彼が宰相に就任し最後に罷めた崇寧元年から大觀3 (1109) 年までの約8年間の詳しく見ることにする。

崇寧元 (1102) 年7月戊子

蔡京, 尚書右僕射兼中書侍郎

2 (1103) 年1月丁未

蔡京，尚書左僕射兼門下侍郎

5（1106）年2月丙寅

蔡京罷める。趙挺之が尚書右僕射兼中書侍郎となる。

大觀元（1107）年1月甲午

蔡京，尚書左僕射兼門下侍郎

2（1108）年1月戊寅

（太師を加える）

3（1109）年6月丁丑

蔡京罷める。

尚，宋朝宰相の官名は，同中書門下平章事，右・左僕射，太宰，少宰，右・左丞相（右僕射・左僕射は政和2（1112）年に太宰・少宰と名を改めた）である。

蔡京は，徽宗の治世26年間のうち，中断はあったがほぼ20年間にわたり最高権力の座にあった権力者であった。彼は利口な人物で，しかし主義主張のない機会主義者であったが，徽宗のような皇帝に対して巧みに取り入って全権を委任される悪役には適していた。豊亨豫大の説を以て積極政策を進め，王安石の新法を継承する政治を行った。しかし実際には蔡京の政治は，積極的と言うよりは放漫的であり，現実的と評価するよりはむしろ享樂的であると言えるものであった。その結果，民衆よりの苛酷な収斂に努めて私利を図ることとなった。蔡京は専横的であると言われるものの，前記の経歴を見ればわかるように，実際には3度権柄を握り，3度斥けられている。つまり徽宗が彼に疑いを抱いた時には，すぐに免職させられたのである。

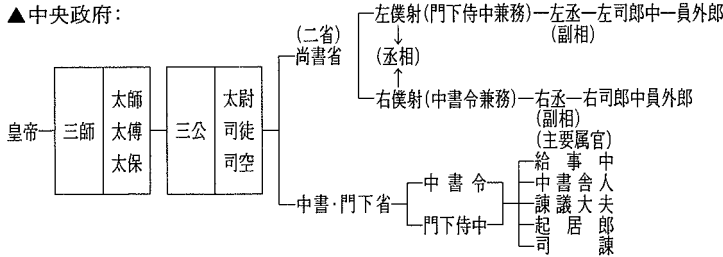
徽宗は，新法実施のおかげで財政は豊かになり，大いに遊樂に耽った。それを指導したのが蔡京であり，彼自身権力を一身に集めて榮華を誇り，自ら奢侈の手本を示したのである。

今，参考までに「中国歴代職官辞典」（日中民族科学研究所編，国書刊

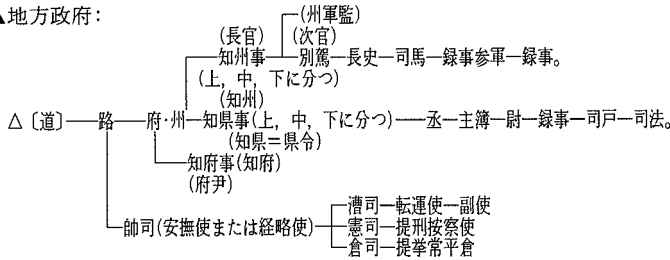


行会)に掲載されている宋代の官制概要を示すこととする。

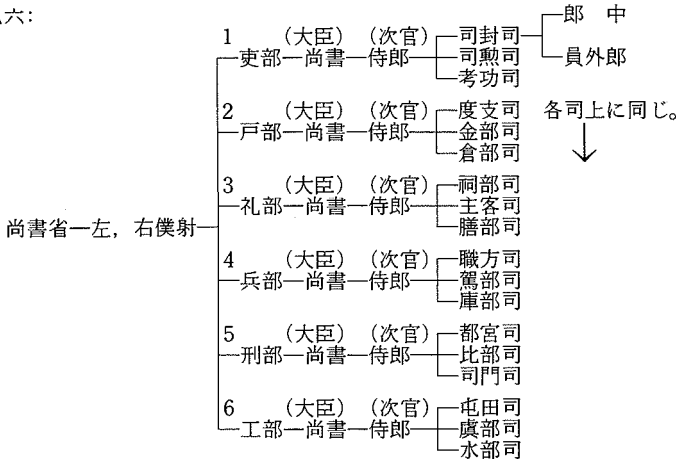
▲中央政府：



▲地方政府：

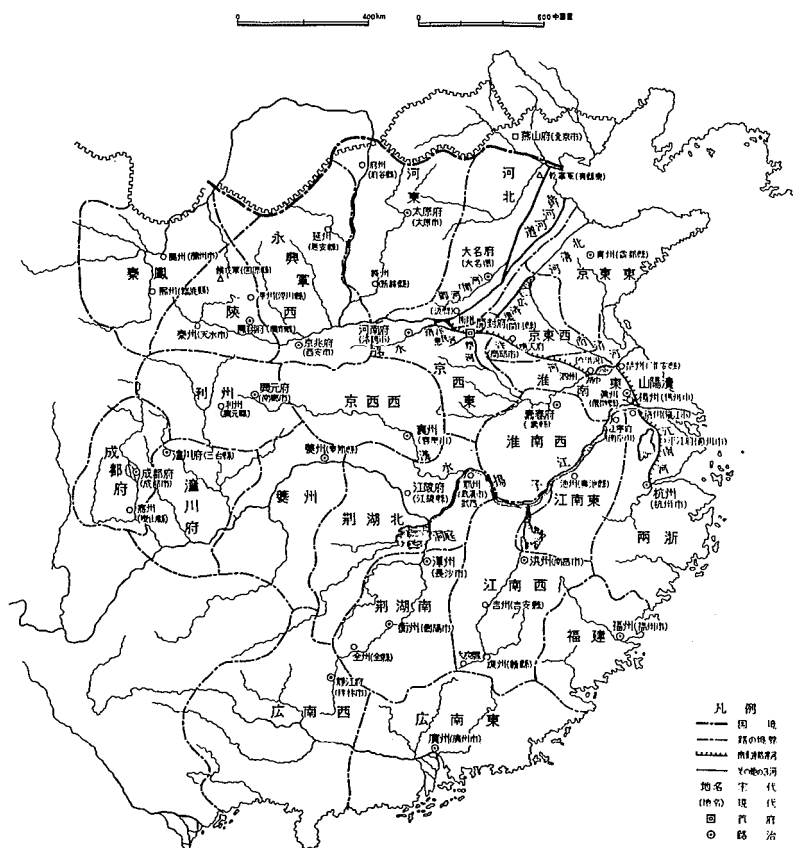


△六：



## 2. 空間的な経歴

次に、蔡京が地方に着任した地域を、年代順に地図を掲載して示すことにする。



舒州…淮南西路 (安慶府)

(1078)  
元豐7年 開封府…京東西路

(0186)  
元祐元年 密州…京東東路

〃 成德軍…河北西路

瀛州…河北東路 (河間府)

(1089)  
元祐4年 成都府…成都府路 (益州)

〃 江淮荆浙等路發運使

- ” 揚 州…淮南東路  
 ” <sup>(1090)</sup> 5 年 潁昌府…京西北路（許州）  
 ” 鄆 州…京東西路（東平府）  
 ” 永興軍…永興軍路  
 ” <sup>(1092)</sup> 7 年 成都府…成都府路（益州）  
 ” <sup>(1100)</sup> 元府 3 年 江寧府…江南東路江寧府（建康府）  
 定 州…河北西路  
 建中<sup>(1101)</sup>  
 靖国元年 大名府…河北西路  
 ” <sup>(1110)</sup> 大觀 4 年 杭 州…兩浙路（臨安府）  
 ” <sup>(1126)</sup> 靖康元年 秘書監分司南京…江南東路  
 ” 崇信軍節度副吏…（陝西平涼府崇信県）

### 三．蔡京の財政々策概観

北宋の中期以降，特に神宗の次の哲宗・徽宗はいずれも王安石の新法を支持して積極的財政政策を採用し，とりわけ徽宗に至っては奢侈にはしり，これを輔けた蔡京・王黼は民衆よりの苛斂誅求をなしたために，歳出入共に大巾に増大した。葉適の「水心先生文集」巻四，財總論第二に，

崇觀以来，蔡京專国柄，託以為其策出於王安石・曾布・呂惠卿之所未工，故變鈔法，走商賈，窮地之寶以佐上用，自謂，其蓄藏至五千万，富足以備礼，和足以広楽，百修並闢，不幸党与異同，屢復屢變，而王黼又欲出於蔡京策画之所不及者，加以平方臘，則加斂於東南，取燕山，則重因於北方，而西師凡二十年，関陝尤病，然後靖康之難作矣，

とあり，蔡京・王黼の二人が徽宗を擁して自己の権勢を誇ろうとして，国家財政を如何に弄んだかが明らかである。蔡京の侵奪したところだけでも千万を以て計えられたと言う。又同書に，

於熙寧・元豐以後，随処之封樁・役錢之寛剩・青苗之倍息，比治平以

前数倍，而蔡京變鈔法以後，比熙寧又再倍矣，

とあるように，封樁錢・役錢の寛剩錢・青苗の倍息錢は，熙寧・元豐年間以後は治平年間以前よりは数倍となり，また蔡京の鈔法の通商法への変更により，現在では熙寧年間よりもその額は2倍になっていると指摘している。一般に財政が逼迫し，民衆に苛斂誅求を要求しても財源の不足をきたした場合の常套手段は，今日においては紙幣の濫発であり，公債の増発である。はたして蔡京はどのような手段を講じたのであろうか。

ここで宋代の貨幣の鑄錢について少し見ることにする。宋代は貨幣としての錢の使用が頂点に達した時代である。錢に関する独占的支配規定，すなわち錢禁と，錢の鑄造原料である銅を確保するための銅禁とは，宋代において最も完備した。整備厳行された北宋の錢禁銅禁は，熙寧7（1074）年正月1日に編勅の改正によって解除された。即ち，嘉祐時代の編勅が，王安石によって改変され，錢禁のうち国外持出しの禁止と銅禁とを解除したのである。その結果，熙寧・元豐にわたる17年9カ月間，宋錢は諸外国に流出し，それぞれの国で貨幣としての機能を演じた。これがいわゆる宋錢經濟圏と称される現象である。この期間，宋においては空前の錢増鑄が実現していた。しかし，この期間は例外的なものであり，これ以外は一貫して錢禁銅禁の時代であった。

さて，徽宗の治世宰相となった蔡京は，民衆からの収斂を重くして天下の財物を集積するとともに，鑄錢額を増加して国庫収入の増を図った。ところが，神宗の熙寧・元豐時代に頂点に達した北宋期の鑄錢額は，哲宗時代以後主として銅原料の不足のために減少の一途をたどっていた。蔡京が宰相となってこの問題に対処した方法は，すこぶる安易なものであった。

第1の方法は，錢貨の切下げである。基礎貨幣である小平錢の銅の含有量を減少して，鑄錢量を維持しようとしたものである。

第2の方法は，当十錢の鑄造である。1個で小平錢10個に相当して流通させる大錢を発行し，名目的に鑄錢額を保持しようとするものである。

第3の方法は、夾錫銭の発行である。鉛・錫の含有量を多くした鉄銭を流通させようとするもので、低品質の材料をもって銅に代えようとするものである。

第4の方法は、通貨の不足を紙幣で補おうとする政策である。

第5の方法は、塩鈔法の通商法への切り換えである。

蔡京は以上の5つの方法を実施して財政権を克服しようとしたのであるが、以下少しく検討を加えていこう。

まず第1の方法で、質を落とした安上りの銭を作って名目的に鑄銭高を虚増しようとした。しかし結果的には民衆はこれを嫌ったので、貨幣の価値は下落し、経済界をますます混乱に陥れる結果を招いた。

次に第2の方法について見る。神宗の熙寧4（1071）年に大銭が鑄造され、全国に行われた。この大銭と言うのは、宋の基本通貨である小平銭に対して、その何個分かの名目価値を賦与された銭である。その重量・大きさ・成分は小平銭には優るが、優越の度合は名目価値の増大に及ばないのが普通である。大銭の利点は、価格の高い場合、小平銭に比較して携行運搬に便利であるということもあるが、それにも増して政府が強い関心を示したのは、その発行によって財政収入の増加が期待できるからである。徽宗時代にはいり、蔡京が宰相として勢力を確立すると、彼は神宗時代にならって大増鑄計画を樹立した。そこで全国に行使させようとして鑄造したのが当十銭である。前出の蔡京の時間的な経歴のところで述べているが、彼は徽宗の世、4度にわたって宰相を努めている。すなわち、崇寧元（1102）年7月に尚書左丞から右僕射を拝し、翌2年正月左僕射へ遷り、5年2月に罷めるまでの3年8カ月の期間である。この間において蔡京は、通貨政策の基本的なものとして大銭を発行し、全国に行おうとしたのである。当十銭は蔡京の通貨政策の眼目をなすもので、崇寧2（1103）年に陝西路で始められ、ついで全国に拡大行使された。今少し詳しく見ると、崇寧2年左僕射蔡京は、陝西転運副使許天啓の議により、陝西において当十銭を鑄造して流通せしめ、更に江・池・饒・建諸州の錢監においても小平銭の鑄

造をやめて、専ら当十銭とし、以て鑄銭原料の銅材の欠乏を補わんとした。しかし元来、不自然で無理な方策であった。貨幣鑄造の祖額を名目的に保持し、財政収入の確保を図ることを目的として鑄造発行された当十銭は、政府に巨大な利益を齎した。国家に利益を齎す当十銭は、他方では同じ利益をめざす民間の私鑄を誘発する。銭貨の価値を低下させればさせるほど、齎される利益は大きい。私鑄銭が流通界に氾濫した。良貨である小平銭(基準貨幣)は退蔵される。悪貨が横行して物価は騰貴する。いわゆる“銭軽くして物重し”の現象である。蔡京は、通貨政策維持のために私鑄禁止令をしばしば出したが、流弊は依然としてやまなかった。崇寧3(1104)年には、蔡京が行おうとした当十大銭の政策はたちまち実行困難となり、翌4年には上供銭監である池・饒・江・建・韶州諸監は、銅材料の十分の八を以て小平銭を鑄、十分の二を以て当十銭を鑄造して上供することに改められている。結局当十銭の鑄造は、蔡京の放漫財政々策の産物の一つであったと言えるのかも知れない。

次は、第3の方法である夾錫銭の鑄造についてである。蔡京は、崇寧2(1103)年に戸部尚書吳居厚の進言に従って夾錫銭を河東路において鑄造し、経済の混乱を回避しようとした。これは混ぜものを多くして銅銭の質を落とし、銅銭を多く鑄造することによって銅銭欠乏の事態を解決しようとするものである。その後陝西路に及ばされ、更には天下に通行せしめることとなった。蔡京は一時野に下ったのち、大觀元(1107)年に再び宰相となり、銭式を下して鑄銭院において夾錫銭を造らせ、これを天下に行うこととした。夾錫銭の全国使用は、宋の貨幣制度の大綱を改変する大事件であった。しかし、この夾錫銭の発行によって物価は3倍に騰貴したという。この夾錫銭は、蔡京の貨幣政策の一環をなすものであった。しかしそれは円滑な運営が本質的に困難なもので、これに反対する者も多かったのである。蔡京の政権の座もしばしば中断し、その致仕中には夾錫銭は否定される傾向が強かった。夾錫銭の鑄造も興廃をくり返し、蔡京と運命をとものにするのである。「宋史」錢幣の条に、「夾錫銭、最後に出ず。宋の錢法、

是に至って壊る」と述べられている。

第4の方法は、紙幣に関する政策である。蔡京は崇寧年間に、福建・江浙・湖広を除く他の京師・京東西・淮南の諸地方、すなわち大体四川を含めての今日の揚子江以北の一帯で錢引を行ったが、停滞が甚だしかったが故に実施後数年にして、即ち大觀3（1109）年に四川・陝西・河東以外は悉くやめられた。徽宗の崇寧・大觀年間頃には交子、すなわち錢引は交換を停止し、あるいは兌換準備金も設けず、しかも濫発をなしたが為に値は下落し、相当悪的なインフレーションの状態を呈している。その後四川の錢引は、民衆に大なる影響を及ぼすということで、大觀3年からはデフレーションの政策に転じ、以後の徽宗・欽宗の16年間は、このままの状態で維持されたようである。

最後に第5の方法である塩鈔法の通商法への切り替えについて見てみよう。崇寧2（1103）年に末塩鈔の大改革、すなわち東南末塩を悉く通商とし、その塩鈔は総て京師権貨務で発行し、東南末塩の権利錢を残らず京師に集中する新たな制度への移行が行われた。これは明らかに権貨務の支払い能力を増して解塩鈔・見錢鈔の大賤落を食い止めようとする目的を持っていたものと考えられる。この東南塩鈔法の実施に伴って、漕運の転般法の廃止と直達法への切り替えなど漕運面で大きな変動が起こった。

以上、北宋末の財政状態悪化に対処して、蔡京が実施した5つの政策について概観した。この中でも、積極的財政型の新法を復活して当十錢や夾錫錢の鑄造が、その政策の根幹をなすことは言うまでもない。しかし、彼が鑄造した当十錢や夾錫錢は輕惡錢であり、今まで保持していた宋の貨幣制度の堅実性は、ここに至って全く壊されてしまった。しかもこの政策は、彼の勢力と共に動揺し、改変も常ならざるものであった。勿論、蔡京がこの時代にこれらの輕惡錢を鑄造して名目的数量の増大をはかった一因は、銅材不足を救おうとすることにあつたわけであるが、逆にそれだけ当時の宋末社会は銅錢不足に悩まされていたことがわかる。結局、彼の政策は失敗に帰し、「徽宗の朝、新法党の蔡京が政局を担当するに及んで、破局を

見るに至った」わけである。

#### 四．結びにかえて

以上述べきったところをまとめてみよう。

蔡京と徽宗皇帝との関係を歴史的に見る時、明らかに政治的なものよりは文化的なものでの接触がまず目につく。

徽宗（在位1100～25）は、兄哲宗が崩じて8代目の皇帝の位についた。向太后摂政の間は旧法が施行され、自らの親政になると父神宗の断行した新法を採用した。しかし政治には熱意を示さず、蔡京を信任して政治をまかせきりにし、豪華な生活をして国費をついやした。徽宗は政治的には才能を持たない人物であったが、その反面文化人としては優れた天分に恵まれていた。このように自ら豊かな才能を持っていた徽宗は、また皇帝として文化事業の保護奨励に非常な熱意を示した。例えば翰林院の書画院の作家に手厚い保護を加えて奨励した。全国より名器を開封に集め、この道のベテラン蔡京等と鑑識・整理のうえ内府に蔵した。しかし徽宗の世は、姦臣の跋扈と天子の奢侈による国帑の消盡と国民の困苦の時代であったと言えることができる。既に前にも述べているように、蔡京はそういう人物達の代表格で、徽宗の治世26年のうち中断はあったがほぼ20年にわたって最高権力の座にあり、特に約8年間は宰相として「宋史紀事本末」巻49に、蔡京擅国という項があるように政治を担当した。彼は主義主張のない機會主義者であったが、徽宗に取り入る悪役には適した人物であった。すなわち北宋末の国家財政難の時期に政権を担当し、新法実施のおかげで財政は豊かになり、徽宗に遊樂を指導し、自らは権力を一身に集めて榮華を誇り、奢侈の手本を示したのである。このおかげで一般民衆が被害を蒙った例は沢山ある。一例を挙げれば花石綱の役である。これは、蔡京の意を受けておもに淮南・兩浙の珍奇な花石や産物を漕船を用いて天子の御前に奉獻したものであり、多大な弊害をもたらしたものである。「宋史紀事本末」巻50、花石綱の役には、「悉科於民、民力重困」と書かれていることから明白



である。

彼の経歴を見ると、進士に合格して以後各地の知事を勤めて中央政府にはいり、最終的には最高権力者である宰相になっている。途中では文化的な職掌を持つ翰林学士をも勤めているし、地方の勤務地を見ても成都府をはじめ各地で勤務し、国家政策遂行に際してもその経験が大いに役に立ったであろうと思われる。

蔡京は北宋末の財政金融政策として、新法の持つ積極型政策を採用した。それらの政策を分類すれば、次の5つの政策に分けられる。

1. 錢貨の切下げ、基準貨幣である小平錢の銅の含有量を減らし、鑄錢量を維持しようとする。
2. 当十錢の鑄造、1個で小平錢10個に相当して流通させる大錢を発行し、名目的に鑄錢額を保持しようとする。
3. 夾錫錢の發行、鉛・錫の含有量を多くした鉄錢を全国的に流通させようとするもので、低品質の材料をもって銅に代えようとするものである。
4. 通貨の不足を紙幣で補おうとする。
5. 塩鈔法の通商法への切り換え

以上の5点が、北宋末の財政状態悪化に対処して、蔡京が実施した政策である。中でも、当十錢や夾錫錢の鑄造が政策の中心をなすことは言うまでもない。しかし、輕惡錢を鑄造して名目的数量の増大をはかっても何ら根本的な解決にはならず、終には政策の失敗を見るのである。

蔡京が行った政策には、財政金融政策以外のものもある。以下それらの政策について述べていこう。

王安石の新法の一つに方田均税法があった。その後哲宗朝に廃止されたが、蔡京によって新法党の重要政策として熙寧3（1104）年7月より再び実施された。そしてこの政策は宣和2（1120）年まで蔡京が政権を執っている限り強行され、その施行範囲も京西路・河北路以外にも、福建・兩浙・江南東西路・荊湖北路・成都府路・利州路等の一部にも及んでいる。しかし徽宗の末年にはこの方田均税法も弊害が甚だしく、豪右形勢戸を抑え

ようとする所期の目的も達せられず、一般農民の賦税負担を増すようなことも起こった。そこで蔡京が宰相をやめると、この法も廃止された。

次に漕運の転般法から直達法への転換についてである。

直達法が全面的に施行されたのは、淮南塩法の改正による崇寧3（1104）年である。淮南塩法の改正とは、製塩を行う亭戸によってつくられた塩を、官設の集塩機関である約25の亭場に集め、さらに楚・通・泰三州に設けられていた5カ所の都塩倉に収め、最終的には真州転般塩倉に集中しておき、東南各路から上供銭米を積んだ船が真州転般倉に来るところで荷物を下させ、空船となったところで転般塩倉に貯蔵されている淮南塩を積荷して、決められた地方州軍において販売させるという官売法を廃して、商人が権貨務に見銭を納めて塩鈔を受取り、これを塩場に赴いて塩を引き換え、一定の地方府州軍で販売させるという通商法に改めたことをいう。この改正によって諸路の漕船は、真州転般倉へ漕米しても帰途の運ぶべき塩が無くなってしまった。このような塩法の改正は、転般法を無意味なものにしたのである。

以上要するに、北宋末の8代皇帝徽宗は政治的な才能に欠けており、ために万事抜け目のなかった蔡京を宰相に登用することによって当時の財政難を克服しようとした。政権を担当した蔡京は、積極型経済政策の性格を持つ王安石の新法を復活させ施行した。しかし弊害ばかりが目につき、あるいは姦臣の跋扈を許す結果となった。遂には金の侵入となり北宋朝は滅亡への道をたどっていくのである。

本稿においては、史料によって姦臣蔡京の経歴を跡づけてみた。今後は、蔡京が赴任した任務地における業績、とりわけその地域での財政々策、それが国家財政運営の面で如何に活かされたのか、等々蔡京の経済政策を説明することによって、北宋末の経済政策全体像を明らかにしていく予定である。

## 参 考 文 献

- 「支那官制発達史」  
 和田 清編著，汲古書院
- 「中国商業經濟史概説」  
 大塚恒雄著，法政大学出版局
- 「紙幣発達史」  
 曾我部静雄著，印刷庁
- 「宋代財政史」  
 曾我部静雄著，大安
- 「東洋史学論集」  
 中嶋 敏著，汲古書院
- 「中国歴代職官辞典」  
 日中民族科学研究所編，国書刊行会
- 「アジア史研究」第一  
 宮崎市定著，同朋社
- 「中国經濟史」  
 河上光一著，八千代出版
- 「宋代の經濟生活」  
 河上光一著，吉川弘文館
- 「經濟史概論」  
 河原由郎著，福岡大学研究所
- 「東洋經濟史」  
 穗積文雄他著，ミネルヴァ 書房
- 「新東洋史綱要」  
 丹羽正義著，弘文堂書房
- 「宋代上供米と均輸法」  
 島居一康（『宋代の政治と社会』汲古書院）
- 「唐宋時代の交通と地誌地図の研究」  
 青山定雄著，吉川弘文館
- 「徽宗の後妃たち」  
 千葉 熒（『中嶋敏先生古稀記念論集』下巻）
- 「北宋末の公田法と華北の諸叛乱」  
 （周藤吉之著『唐宋社会經濟史研究』東大出版会）

「銅鉄錢問題の研究」

（同 上）

「北宋に於ける方田均税法の施行過程」

（周藤吉之著『中国土地制度史研究』）

「歴代職官表」

黄 本驥著，楽天出版社